

睡眠休憩わずか1時間で乗務させオーバーラン

JR西日本 安全軽視の責任は重大



7月22日の定例記者会見で、JR西日本社長は6月の神戸線で発生したオーバーランについて説明しました。しかしその内容は、会社の安全軽視と責任回避の姿勢を浮き彫りにするものです。

当該運転士は6月26日11時55分に乗務を開始し、本来は23時40分頃に業務を終え、約6時間の睡眠休憩を取る予定でした。ところが台風によるダイヤの大幅な乱れにより、乗務は27日午前4時過ぎまで延長され、休憩はわずか1時間にまで削られました。

睡眠不足を知りつつ乗務させた

重大なのはその後の会社の対応です。会社は点呼の段階で運転士の深刻な睡眠不足を把握していました。しかし「本人が問題ないと報告した」として乗務を続行させた結果、7時過ぎに停車駅を通過し、約250分先で停止するオーバーランが発生しました。運転士自身も眠気や意識低下を認めています。

本来、乗務の可否

を判断する責任は会社にあります。それを個々の運転士の自己申告に委ねたことは、安全管理の放棄です。過労や睡眠不足が判断力を低下させることは明らかであり、その状態での乗務を容認した責任は極めて重大です。

にもかかわらず社長は「問題のない判断だった」「因果関係は分からない」と述べ、責任を認めません。この姿勢は、安全よりも運行維持を優先してきた体質を示すものです。また「今後は運休もあり得る」との発言も、裏を返せば今回のようなケースでは無理な乗務を容認していたことを意味します。

乗務員への労働強化の結果だ

今回重大事故に至らなかったのは偶然にすぎません。背景には、行路の過密化や長時間化、そして要員削減による慢性的な労働強化があります。通常時から余裕のない体制を強いている以上、台風などの異常時に安全が揺らぐのは必然です。

鉄道の安全は、現場の努力や個人の責任に委ねられるべきものではありません。必要なのは、余裕ある要員配置と十分な休養を保障する運行体制です。その実現のためにも、会社の安全軽視をただし、現場の団結と労働組合の力を強めていくことが必要です。